

## 新美術時評

島尾 新

時評の書きづらい時である。先が見えないところが現状がつかめない。福島原発は見えない先が目に見えるけれど、まだ顕在化していない経済のダメージなどは、どこまでえらいことなのかはつきりしない。こちらの世界でも雪崩をうった展覧会の中止や延期は一段落。東京国立博物館の写楽や江戸東京博物館の五百羅漢なども開きだしたが、そのまま「復興」というわけにはゆくわけもなからう。震災がなくとも、政治を初めとして行き詰まった日本のシステムに、さまざまにパラダイム転換が必要なのは明らかだったのだが、対応すべき状況の基礎データが、さら

始まって、北斎のイメージを用いた、切手や楨図かずお・暖嘯などの作品まで。我が大学の佐藤晃一さんの「甦える北斎模様」と、ここで出会えるとは思わなかった。ふつうは最後に置くものが最初にあ

に「けいこうやるな」と思ひ、萬福寺天王殿の韋駄天の素晴らしさに「こんなのがあったのか」と感心し…。「寺で拝むべきものをホワイトキューブへ置いたって…」という批判は常にあるが、コンテクトチェンジで見えるものもある。「いまや美術館というのもひとつのコンテクトに過ぎない」などと理屈をこねる以前の、あまりに基本的なレヴェルでお恥ずかしいが、こういう時期には気分も頭も巻き戻されるもの。妙に素直に展覧会を楽しめた。

## 震災後九州の博物館を訪ねて

に把握できなくなってしまうた。

などと思いつつ九州の「大北斎展(福岡市博物館)と「黄檗」展(九州国立博物館)へ行ってきた。直接の被害のない所で、少しだけほっとしようと思ったのだが、福岡は大雨。しかし「北斎はお客さん多いですよ。土日はけっこう行列してます」というタクシ

るといいうのも面白い。展示は、若い時期からの版画から淡々と始まる。華々しく北斎の「三才」のみを強調するのではなく、地道に鍛え開花してゆく北斎がよく見えた。そして太宰府へ。九博で新鮮だったのは黄檗の彫刻。絵や書には馴染みがあるが、仏像をしばしば見たことはなかった。長崎にも宇治にも行ったのに。まあ清の時代の彫刻への偏見である。福建から来た17世紀の後半の、少々不気味でアクが強いが大したことはない…。しかしギャラリ

天満宮の方に伺ったら、やはりあちらからの観光客はほっとたりと途絶えたようだ。四月に訪日した外国人は前年比で62パーセント減。日本全体が、ここで稼ごうとしていた矢先である。当然、美術館・博物館にも影響は大きい。ピンポイントでの浜岡原発停止も、震災発生確率9割を提示しての「ここはあぶない」宣言のようなもの。そんなところで海外から美術品が来てくれるのだろうか…。しかし、あちらから来ないなら、こちらから行くしかないか…。では方針にもならない。さて中期的な対応をどう考えればいいのか。

(美術史家)